Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 言葉からたどるファッション・デザインへの意識の萌芽 : 洋服裁縫師, 洋服裁断師から「デザイナー」へ |
| Author(s) | 安城, 寿子 |
| Citation | デザイン理論. 2011, 57, p. 130-131 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/53505 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

# 言葉からたどるファッション・デザインへの意識の萌芽
## ── 洋服裁縫師，洋服裁断師から「デザイナー」へ ──

安城寿子／お茶の水女子大学大学院博士後期課程

### １．はじめに

本発表では，近代の日本における洋服の製作がいかなる理念に基づいて行われていたかを考える方法論として，まず，洋服の作り手を意味する言葉の変化に注目する。

同業者向けの，言い方を換えるなら，製作者によって製作者に向けて書かれた資料を見ていて気付かされるのは，明治末から昭和初期にかけて，洋服の作り手を意味する言葉に二つの変化が起こっているということだ。一つ目の変化は，明治末から大正期にかけて，それまで用いられてきた「洋服裁縫師」という語に加えて，「洋服裁断師」という語が多用されるようになったという変化である。二つ目の変化は，大正末から昭和初期にかけて，新たに「デザイナー」という語が登場を見るという変化である。こうした変化から，私たちは何を読み取ることができるだろうか。

### ２．「洋服裁縫師」と「洋服裁断師」

明治以来，洋服の作り手を意味して広く用いられてきた言葉として，「洋服裁縫師」というものがある。読んで字の如く，「裁ち」「縫う」ことを生業とする職人を意味する言葉であるが，明治末から大正期の資料では，「洋服裁縫師」という語に加えて，裁断工程の担い手を意味する「洋服裁断師」という語を用いた例が散見されるようになる。これにともない，それまで洋服の作り手一般を意味していた「洋服裁縫師」の方も，その意味合いに変化を生じ，大正末には，縫製工程の担い手を意味して用いられるようになった。

以上の変化は，次のような文脈において立ち現れた。日露戦争後の俸給生活者の増加にともなう洋服需要の増大―言うまでもないことだが，この場合の「洋服」とは紳士服のことである―を受けて，業界内では，あらゆる体型の身体に理想の洋服を提供すべく，裁断技術の向上を求める動きが活発化した。この時重視されたのが縫製でなく裁断であったのは，それが洋服の形を決定づける工程であることに加え，伝統的に直線裁断が主流で，衣服を着用者の身体に沿わせることに価値を置いて来なかった日本にあって，それが二重の意味での課題となったからだ。明治末から大正期にかけては，独自の裁断技術の研究成果をまとめた教本が相次いで刊行され，同業者に向けて新たな裁断法を披露する「洋服技術大会」なる催しも，大正５（1916）年と翌６年の二回，日本毛織物新報社の主催で行われている。こうした動きは，誰によって誰のための洋服が作られても完璧な洋服を生み出すことができるような，合理的で普遍的な裁断法の普及を図るものであったが，その意味で，それは，極めてモダンな理念に裏打ちされていたと言うことがでるだろう。

「洋服裁断師」という語は，以上の文脈の中で多用されるようになったもので，それ自体，洋服の作り手たちが，裁断技術に長じていることによって意味を与えられる価値観の中で製作を行っていたことを示している。裁断技術に長じているということは，注文主の体型を勘案しつつ，理想とされる洋服の構造を再現できるということである。アン・ホランダーは，その著書『性とスーツ』において，十八世紀後半の西洋で「発明」されたテイ

ラード・スーツが，合理的かつ普遍的な構造の追求の賜物であったことを指摘したが，「洋服裁断師」という語が多用されるようになったという変化は，そうした紳士服の製作をめぐる理念が，日本においても明確な形で意識されるようになったことを象徴していると言えないだろうか。

## 3．「デザイナー」の登場

大正末から昭和初期にかけては，洋服の作り手をめぐって，新たに「デザイナー」という語が用いられ始める。それは，当時のモダン風俗を彩る記号として多用された多くのカタカナ言葉の一つであったが，他方，それまで特別な呼称を持たなかった婦人服の作り手を意味する斬新な言葉でもあった。

以上の変化は，生活改善運動やモダン風俗の力によって，女性の洋装が以前に比べて一般的な選択肢となり，欧米とりわけパリの最新流行をめぐる情報がもたらされるようになったという変化と連動している。「デザイナー」とは，ただ婦人服の作り手を意味する言葉ではなく，そこには，明らかに，その流行を生み出す存在という含意があった。この時留意しなければならないのは，この「デザイナー」という言葉が，当初，日本には未だ存在しない理想を意味するそれとして用いられていたことだ。例えば，洋裁教育のパイオニアとして知られる田中千代は，昭和８（1933）年の著書『新女性の洋装』において，「モードは例えばパリーの一流衣裳店のデイザイナー（衣裳図案案家）の頭から出るのです。一流の衣裳店ではデイザイナーが頭に持ってゐる或一つのモーテイブを現在のエックスプレッションとして一つの服を作り出します」と述べている。以上の記述に明らかなように，当初の「デザイナー」という語が意味していたのは，欧米で製作を行う婦人服の作り手であり，日本においてはいまだ受容されるのみのモードを生み出す存在であった。モードをめぐっては，後に，その模倣を脱して日本独自の流行を創るべしとの言説が台頭を見せるが，この時点では，モードもそれを生み出す「デザイナー」もまた，製作の際に必ず参照されるべき理想として立ち現れたのである。

前出のアン・ホランダーは，十九世紀後半の西洋において，自らの名のもとに独創的な製作を行い，その独創性によって流行の先駆けとなる―ファッションをデザインする―デザイナー像が生まれたことを指摘している。こうしたホランダーの指摘を踏まえて，「デザイナー」という語の登場について考えるなら，それは，そのまま，近代の西洋で生まれたファッション・デザイン観というべきものが，日本の製作現場に移入されたことを示す変化であったと言えよう。

## 4．おわりに

以上，洋服の作り手を意味する言葉の変化を入り口として，明治末から昭和初期にかけて，紳士洋服と婦人洋服それぞれの製作の場において，近代の西洋で生まれた衣服製作をめぐる価値観が受容されていたことを確認した。本発表では，そうした価値観の受容をめぐって当然起こったはずの葛藤までをも明らかにすることができなかったが，それについては，今後の課題としたい。

## 【引用文献】

アン・ホランダー『性とスーツ』中野香織訳，白水社，1997年。
田中千代『新女性の洋装』南光社，1933年。